

江戸に学ぶ

Unbound in Edo

永田 円了

江戸っ子は宵越しの銭をもたない。お金に執着しない、そのやせ我慢の矜持を胸に、浮世を身軽に生きていく潔さは、一体どこから生まれたのだろうか。歴史を紐解くと、江戸時代 260 年の間、大火が 10 回も起こっていた。普通の火災も含めると、なんと 3 年に 1 度の火災が発生していたのである。江戸の町はその都度焼け野原になった。にも拘らず、住民の表情は暗くはなかった。

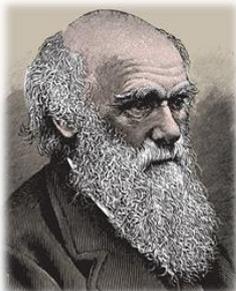
当時の英国駐日公使の日記に、次のような記録がある。「江戸の人々は、火事で焼かれることを運命として受け入れ、安普請の家で暮らしている。家が燃えても悲しまず、不満にも思わず、いつも上機嫌で幸せそうだった」と。そんな江戸っ子への誉め言葉は、「お前さん粋だね！」

身軽に生きる

考えてみよう。果たして私たちは、日々どれだけの荷を担いで生きているのだろうか。例えば、バックパックの中に、人生の持ち物を全て；タンスの中の物、机の引き出しの小物類、服、電化製品、ソファ、ベッド、布団、車、そして住んでいる家までも、すべて詰め込んで歩くことを想像してみよう。重くてとても歩けたものではない。人生も同じ。私たちはこの重荷で動けなくなっているのではないか。しかし人生は動かねばならない。

およそ 2 億年前の地球に翼竜が住んでいた。翼を広げると 12 メートルにもなり、当時の空を我が物顔で飛んでいた。一方、鳥の先祖と言われる始祖鳥は、この翼竜の雄大な姿を木陰から羨ましげに見上げていた。ところがその後、地球環境の激変が起こり、翼竜と鳥は運命の別れ道を辿るのである。

穏やかな環境では威力を発揮した翼竜の大きな翼は、環境の変化について行けず絶滅する。一方鳥たちは、自らの身体をより軽く、より小さくすることで変化を乗り切った。無風状態では、自らの筋力によって飛んだ。



運と適応

将来何が起こるか誰も分からない。何かが起こった時、強い者や賢い者が生き残るというのは間違いである、とダーウィンは「種の起源」の中で述べている。「運と適応」が生き残りを決めるという。環境の変化をそのまま受け入れ、あとは運に任せるということである。

地震、火事、水害などの大災害のとき、江戸時代の住民は、鳥のように、身軽で環境の大変化に適応できたからこそ、当時人口 100 万人の大都市をつくることができたといえるのではないだろうか。将来何が起こるか分からない。それを、“怖い”と取るのか、いや人生予測できないから“面白い”、と取るのか、それは私たち次第。「漂っている中で、出会いがあり、その偶然がその人の人生を決める。人生は川の水のように流れ続け、流れ着いた処で、一生懸命やってみれば、何か面白いものが見つかるかもしれない」と、出口治明氏は述べる。

<事例 DVD 等>

「マイレージマイフ」Up in the air 2009 年米映画
大河ドラマ「べらぼう」より、鳥屋重三郎の知恵
江戸の怪談、恐怖の秘密～四谷怪談、番町血屋敷等
悪役の魅力：片岡仁左衛門「悪の華」「色悪」
「女殺油地獄」2009 年 6 月歌舞伎座公演、片岡仁左衛門
「配られたカードで勝負する」米映画「ファミリービジネス」
最後の講義・出口治明（72 歳）ダーウィンの進化論 2020/7/24
ハートネット TV「脳出血からの復活・出口治明」2025/1/25
詩・さだまさし「その橋を渡るとき」Rubicon River

円了のホームページ：www.enryo.jp

